

年の五重塔の創建当時に、天井板の文様を彩色した画工らが筆ならしのために書いたものであることが、伊藤卓治氏らの研究によって判明されています（「醍醐寺五重塔天井板の落書き」『美術史』昭和32年3月）。

ところで、ここで発見された「あふことのあけぬなからにあけぬれはわれこそかへれころやはゆく」という一首の和歌は、関根慶子氏が指摘されたように（「伊勢・伊勢集の受容に関する二題」『平安文学論集』所収、風間書房、平成4年）、「東宮の女御」つまり敦仁親王（後の醍醐天皇）の養母であった藤原温子が、伊勢に題を与えて詠ませた、一群の屏風歌の中の1首だったのです。五重塔の落書きの時点は、屏風歌の製作年次、すなわち寛平8（896）年6月から翌年7月までからして、約50年しか隔てておらず、その間、伊勢の屏風歌は人口に膾炙して、画工たちも暗唱して筆ならしに落書きしたのであろうと推定されています。屏風歌なるが故に、こうした画工たちも見たということも有りえるし、彼らの間に語り伝えられたとも考えられるのです。そして、このようにして広く貴族社会の中で共有されることを得た屏風歌独自の表現様式は、屏風歌が衰えた後にも題詠歌の中に受け継がれ、その基盤をなすことになるのです。

戯作の中の絵銭

腮尾 尚子

江戸時代の「文学と美術の交流」——といった場合、よく取り上げられまた研究も進んでいるといえるのは、芝居錦絵と江戸後期の草双紙・読本との相互影響関係、といったテーマであろうかと思えます。しかし、劇場という言葉はハレの遊び場を離れた、大衆の日常生活レベルで改めて考えてみた場合、大衆のごく身近にあって深く親しまれていた図像は何かといえ、それはむしろ、床の間の掛け物や御札・絵馬等に描かれている、神仏など信仰に係わる画題の図像だったのではないか、という見方もできましよう。

そのような考えから、私は大衆の身近にあった信仰に係わる図像を取り上げる必要を感じ、今回、特に、その一つとして絵銭というものに着目し、文学研究の立場からの調査研究の報告をさせて頂くことに致しました。

絵銭とは、江戸時代を中心として、大衆の生活の中で、また好事家（コレクター）の間で、愛玩されて来た、銭貨とは似て非なる一種のメダルです。この絵銭は、中央に方形の穴の開いた円盤状の形状や大きさこそ、一般の銭貨とよく似ていますが、実際に流通した通貨ではなく、お守り・装飾品・副葬品等として用いられたものであったことが既に明らかになっています。絵銭の表面には、神仏や民間信仰に関係のある絵柄や文字が鋳出されており、代表的絵柄としては、「恵比寿」「大黒」「駒引（人や猿が馬の手綱を引いている絵柄）」等が古来よく知られているところです。

従来の絵銭研究を振り返ってみると、例えば、江戸時代の墓地の跡から絵銭を発掘する等といったように、絵銭の現物そのものを対象としてなされる研究が、主流を占めていたように思われます。これまでの、主として歴史学・考古学・民俗学的アプローチによって、漸く絵銭そのものの基本的性格が究明

されてきているのは確かですが、現段階では、まだ依然として、絵銭が大衆生活の中でどのように享受されていたか、という実態については、充分解明されているとはいえません。

そこで、今回のこの報告では、近世文学研究の立場から、絵銭の実物そのものではなく、敢えて、戯作の挿絵や一枚刷りの「見立ての道中」等といった出版文化の中に現れた、描かれた絵銭の姿に注目し、その描かれ方を分析することによって、今までわかっていなかった絵銭の享受の一側面を明らかにすることをめざしたいと思っております。

絵銭の表面に鋳出された図柄は、美術品と呼ぶには素朴すぎる程のものかもしれませんが、絵銭とその戯作を通して、きらびやかな錦絵と精緻な読本挿絵の間にみられる交流関係とはまた違った、もつとより土俗的で、それゆえに現代人の眼には見過ごされがちであった、いわば埋もれた美術・文学の交流関係の一つのありように、光を当ててみたいと思います。

(今回の発表内容については、更に資料を増補し、論文の形にまとめ、場を改めて近日中に公表する予定である。)

川端文学と古美術

谷口 幸代

はじめに

今年は川端康成生誕百年の年です。それを記念して各地でさまざまな催しが行われています。例えばつい先日まで大阪の茨木市にある川端康成文学館では「めぐりあい・川端文学と美術～美術と文学の融合～」と題した展覧会⁽¹⁾が開かれていました。茨木市は川端生誕の地で、豊川小学校の同級生には笹川良一氏がいます。この茨木の展覧会は、現代の画家や書家が川端文学に描かれた場面からヒントを得て制作した作品を展示したものでした。

それに対して私が今日ここでお話させて頂くのは、これとは逆に川端文学の成立の基盤に美術への感動があるということです。私はこれまで川端文学と美術、特に古美術との関連について研究して参りました。それは第二次世界大戦後の川端文学の豊かさが古美術を源泉として生まれてきていると考えているからです。お手元の要旨に書きましたように、今日は、焦点を絞って初期の『伊豆の踊子』⁽²⁾と戦後の『千羽鶴』⁽³⁾という二つの作品を取り上げ、それぞれ川端と美術面との関わり方について、いくつかスライド⁽⁴⁾をご覧頂きながらお話して参ります。

1 『伊豆の踊子』をめぐって

まず最初にご覧頂きますのは、『伊豆の踊子』の初版本⁽⁵⁾です。これは金星堂という出版社から1927年3月に出版されたものです。装幀は吉田謙吉⁽⁶⁾の手によります。

吉田謙吉は築地小劇場で活躍した舞台装置家です。初演のゲーリングの「海戦」⁽⁷⁾以来、表現派の舞台美術として大きな話題を呼んだことで知られています。それに加えて、文学の場でもその才能を発揮し、同人誌「芸芸時代」や「青空」の表紙⁽⁸⁾や川端の『感情装飾』⁽⁹⁾、『浅草紅団』⁽¹⁰⁾、そしてこの『伊豆の踊子』の装幀も手掛けています。